

## 佐田介石略年譜

梅林 誠爾

佐田介石に出会ってから、四、五年になる。これまで『文彩』二号、三号に、短文「佐田介石をたずねて」を載せていただいた。今回は、一応の結びとして、佐田介石の人となりをまとめてみたい。仁藤巨寛著『等象斎介石上人略伝』（耕文社、明治十六年四月九日出版）や浅野研眞著『明治初年の愛国僧 佐田介石』（東方書院、昭和九年）など、先人の介石略伝を参照することにする。

仁藤巨寛は、介石の弟子で、長野新潟縣下の介石最晩年の遊説につき従い、旅先での師の入寂（明治十五年「二八八二」、十二月）を看取っている。『明教新誌』（明治



鹿児島大学図書館所蔵  
『略伝』より

十六年三月六日、八日、十二日号）に、「等象斎佐田介石上人略伝」を寄稿し、補充訂正して『等象斎介石上人略伝』

を著している。上の写真は、『略伝』扉絵の介石像である。「国のため、法のためとて、身のかきり、つくしてはてん、たほれふすまで」とは、介石の述懐の句である。（『略伝』及び介石の明治時代の著作の多くは、国立国会図書館、近代デジタルライブラリーHPにおいて公開されている。）

文政元「二八一八」年、八代郡種山村浄立寺に生れる

『略伝』は、「文政五壬午歳 又暨庚戌真宗も云 肥後国八代郡鹿島邑 種出郷も云 に生る。姓は廣瀬 眞宗浄立寺 父は慈博、母は佐伯氏なり。師、諱は介石、断識と号す。壮歳の後、同国飽田郡小島町佐田氏 眞宗浄立寺 に養はる、によりて其姓を冒す。」と言う。

介石誕生の年は、割注（割注は、引用では小文字で表記した）が正しく、文政元年「二八一八」であろう。浅野研眞は、明治七年「一八七三」の建白書奥書に「齢 五十七歳」と介石の自署があることから、文政元年説を採っている。実際、筑摩書房刊『明治建白書集成』第三巻、第四巻に収録された介石の複数の建白書を見ると、明治七年の建白書には「齢 五十七歳」、明治八年の建白書には「齢 五十八歳」とある。

誕生地も、割注が正確であり、「熊本県肥後国八代郡種山村「現八代市」真宗本願寺派浄立寺」に生まれている。

ただし、浄立寺は、明治十年の西南戦争で焼失し、明治十二年に八代郡鹿島村（現在、氷川町鹿島）に移転・再建され、現在に至っている。

介石の父は浄立寺住職廣志慈博、母は佐伯氏出身のマチであると氷川町鹿島の浄立寺に伝えられている。介石は、後に飽田郡小嶋町（現熊本市小島中町）正泉寺の佐田氏に迎えられ、佐田薫を妻とした。また、浅野研真によれば、幼名を觀靈といい、等象齋と号してもいる。

#### 少年時代（一八歳頃まで、一八一八〜一八三六頃）、

##### 漢籍を学ぶ

介石は「七歳の頃より同邑の儒士何某の許に至り五経の学を受」け、「神童」と呼ばれる優れた少年であったと、『略伝』は言う。さらに、「十三の時より同邑の深山に独り自ら草廬を構ひ、昼夜孜々として経義を精究す。…山居すること凡そ六年にして已に儒宗の学を尽せり」と伝えている。中学、高校の年齢の頃ということになるが、介石は、独り山に籠って四書五経など儒教の正典と格闘し、多くを学び得たのであろう。介石は、後（文久元年「一八六一年」）に助辞に関する長大な論考『助字彙』（吉川幸次郎他編『漢語文典叢書』第二卷、一九七九所収）を著し、また西洋天文学に対して、仏教の須弥山説とともに、中国上古の蓋天

説を強く擁護することになる。「儒宗の学を尽せり」というのは、ただのほめ言葉ではないだろう。少年時代の中国古典の知識が、介石の思想の下地となっているように思われる。

#### 青年時代（十八〜三〇歳前、一八三六〜四八年頃）、

##### 仏教学を本願寺大学林に学ぶ

十八歳から二十歳代、介石は、故郷を出、主に京都において、「悉曇の学」すなわち仏教学を修める。「十八歳の時…善友良師を各県下に求め、…後京都に遊学し…法雲、…南溪の両師に本願寺の大学林に見ゆ。師…俱舍・婆娑・唯識・成実・因明等悉曇の学を…解了、…蘊奥を極む…」と、『略伝』は伝える。また、「…師の母…自ら衣資を減し、飲食を節にし、金五百両を贈り…学資に充つ…」と、母の子に対する思いを伝えてもいる。

井上哲雄著『真宗本派学僧逸伝』（一九七九）によれば、法雲（一七九一—一八四七）、南溪（一七九〇—一八七三）は、本願寺の「筑前派」の学僧である。とりわけ南溪は、幕末維新期、神道やキリスト教からの圧力を強く感じ、神道に対しては『神仏水波弁』を、キリスト教に対しては『闢邪弁』『杞憂小言』などの排耶書を著し、幕末の護法論者として有名である。介石は、師南溪から仏教学とともに護法

思想を学び取ったものと思われる。

さらに、『略伝』には、「師東山臨濟宗東福南禅の両寺に留錫すること十有余年。」とある。介石は、若い時から、自宗（浄土真宗）の学



だけでなく、仏教学全般、また外学（暦学、国学、儒学、破邪学など）への広い関心を持っていたのである。紅葉が終わったころ東福寺を訪れたことがあるが、その塔頭の一つ、靈雲院は、かつては学僧たちの道場だったと言う。しかも、熊本

との縁が浅くない。靈雲院の書院から眺める枯山水の庭の中央には、須弥山を象った石造りが配してある。この石は、細川家重臣の角田（松井）家の出である湘雪守沅（一五八八〜一六六八）が第七代住職となった際に、細川家から贈られたものだと言う。そうした言い伝えを聞くと、介石が仏教の天地像を模した靈雲院の庭（写真参照・筆者撮影）を眺めながら、修行していたとしてもおかしくはないと想像されてくる。

仏教天文学を学び、視実両象の理を發明（三十〜四十歳頃、一八五〇〜六〇年頃）

かつて、須弥山を世界の中心に据える天地像は、仏教の信仰と深く繋がっていて、西洋の地動説や地球説はその信仰世界を危うくするものと思われた。西洋近代天文学が普及し始める十九世紀初頭、普門律師円通（一七五四〜一八三四）は、仏教の信仰世界を擁護するために、大著『佛国曆象編』（文化七年「二八一〇」）を著し、仏教天文学を創設している。

介石が円通の佛教天文学に出会うのは、一八五〇年頃、三十過ぎであろう。ペリーが浦賀にくるこの頃、天文学を含む西洋近代科学は民衆的啓蒙の時代を迎え、人々の間に広まり、仏教の信仰世界はいよいよ危うくなってくる。『略伝』は、「師三十歳の頃西洋の地動説ちどうせつ稍世間に行はれ、吾佛の須弥説を疑ふもの諸方に競ひ起る」と述べている。介石は、円通の高弟、環中禪師が天竜寺において、「佛曆の天文を主張し、西曆の地動を駁激せらるるを聞き」、環中の許で仏教天文学を学ぶことになる。「沈思黙考すること十有余年」、介石は、ついに西洋天文学に対抗する「視実両象の理」を發明し、「佛教天文器視実等象儀を製造す。…今を去ること二十有余年なり」「安政五年、六年「二八五八、九」頃か」という。

『略伝』は、「視実等象儀」が文久二年「一八六二」の京都の騒乱で灰燼に帰したと伝えている。それでも、介石が、安政二年「一八五五年」には天文器制作を思い立ち、安政五年または六年「一八五八、九年」に完成させていたことを、『龍谷大学三百五十年史 史料編第二巻』に収められている『学林万檢』（江戸時代の本願寺学林の実務担当者の日録）によって確認できる。その中には、安政二年二月学林の所化（学生）であった観霊（介石の幼名）が天文器制作を学林に願い出たことを示す記録、それから四年後の安政六年二月、江戸出府の途中伏見に居た肥後藩主の宿に、介石が視実等象儀を持参したという記録、また同年三月廿二日、「介石数年精心研候品」の視実等象儀を西本願寺宗主の見覧に供したという記録がある。



介石は文久二年（一八六二）に、最初のまとまった天文地理書『鍬地球説略』を著し、「視実等象の理」を始めとする介石の天文地理説を主張し、さらには「視実等象儀」の挿絵を載せている。安政の「視実等象儀」は、この挿絵（写真参照）のようなものではなかったかと推測される。

『鍬地球説略』は『地球説略』批判である。『地球説略』

は、中国在住の米国人牧師 R. Q. ウェイにより、中国で一八五六年に出版されている。地球説、地動説とともに、世界の人文・自然を挿絵付きで説明した漢文啓蒙書で、訓点や訳解を施されて日本で広く読まれた。介石はさらに、中国在住の英国人宣教医 B. ホブソンの漢文科学啓蒙書『博物新編』（一八五五）も批判している。介石が直接批判しているわけではないが、福沢諭吉も、科学啓蒙書『訓蒙究理図解』（慶応四年「一八六八」）などを出している。介石が批判し論争している相手は、西洋近代の専門科学書というよりも、それをわかりやすく紹介し、人々の生活に直接強い影響を与え始めた漢文や和文の科学啓蒙書であり、啓蒙の科学（ポピュラー・サイエンス）としての西洋天文学である。介石にとっては、科学啓蒙書がもたらす人々の生活世界の変化が問題であった。

#### 幕末政治への関与（四十代半ば、一八六三、四年）

谷川穰「周旋・建白・転宗」佐田介石の政治行動と『近代佛教』——（『明治維新と文化』吉川弘文館、二〇〇五年）が詳しく述べているように、介石は、激しく揺れ動く幕末の政治に関わっている。文久三年「一八六三」八月十八日のクーデターにより、長州と尊攘派公卿が京都政界から排除され、松平春嶽、一橋慶喜、松平容保、島津久光、伊達

宗城ら公武合体派が参与会議を構成し、長州処分などについて議論を重ねる。幕府と長州との緊張は厳しさを増しつつ、元治元年「一八六四」七月十九日の禁門の変へと進んでいく。

緊迫した状況の中、介石は、文久三年「一八六三」十二月、一橋慶喜、松平春嶽に建白し、「たとへ差免なされ難き重罪これ有り候とも何卒御格別の御憐愍の御沙汰あらせられたし」と、長州藩への寛大な処置による戦乱の回避を申し出ている（『改定肥後藩国事史料』巻四）。また、『略伝』によれば、介石は、武力を使わずに長州藩を幕府に帰順させる方策を、松平容保に、「…西京興正寺は毛利家と別懇…幕府の命令を以て興門跡をして之が軍代たらしめ、…介石自らが副使として…周旋し長藩をして幕府に謝罪せしめ、干戈…なくして平治に帰せしむるの策略をめぐらさんと欲する」と進言したと言う。さらに、『改定肥後藩国事史料』巻四は、宇和島藩伊達家家記「鶴鳴余韻」から、「（元治元年）三月十三日僧介石伊達宗城に謁して興正寺門跡をして長州説得使たらしめられたき旨を進言」したときの記録を取めている。伊達宗城は介石の提案を可とし、近衛忠熙と相談し、島津久光の同意も得て、この長州説得案を長岡良之助（細川藩主斉護の六男、長岡護美）を介して一橋慶喜に伝え、同意を得ている。しかし、説得使に立てられ

た当の興門跡すなわち興正寺撰信が、説得に自信を失ったこともあり、介石の提案は実行されずに終わっている。

一学僧に過ぎない介石が、なぜ幕末政治に関与するといふ大胆な行動に出たのだろうか、それはどうして可能だったのだろうか。まず、介石には強い信念があったものと思われる。その信念は、上記建白に、「当時者外夷を敵といひたし攘夷の御模様も有之候へは、取分御富国の御策も可被為在折柄「あらせらるべきおりがら」、内輪喧嘩ニ楽屋ニ声枯し、却而「かえつて」夷狄の術中ニ落入可申故「おちいりもうすべきゆえ」、格別之権道の御処置被為在度事「あらせられたきこと」能々肝要かと奉存候」と語られている。つまり、現在の課題である攘夷を果たす上で、とりわけ大切なことは富国であつて、内輪喧嘩ましてや武力による喧嘩は、国を荒廃させ西洋列強を利するだけだから、是非とも避けていただきたいといふ、いわば富国攘夷論の信念である。さらに、「鶴鳴余韻」は、介石を「西本願寺の学頭介石」と言い、「長州と本願寺とは輝元顕如の時代よりの関係」を強調する介石の言葉を書いている。谷川穰が指摘するように、介石の行動には、長州と関係が深い本願寺や興正寺の意思が働いていたと思われる。また、「鶴鳴余韻」にあるように、細川家の長岡護美が介石の行動を支えていた可能性が高い。介石入寂後、明治十八年「一八八五」、「佐田介石上人碑」が浅草寺内に

建立されるが、碑には長岡護美の名が、久邇宮、三条公、福田行誠、中村正直、その他数百の人々の名とともに並んでいる。

### 廃仏毀釈への対応(五十三歳頃、明治三年「二八七〇」頃)

介石は、西本願寺の僧侶として明治維新を迎える。既に幕末に平田神道からの仏教批判が強まっていたが、維新政府が「王政復古の沙汰書」において、「諸事神武創業之始ニ原キ」と神道主義を政の基本とすることを宣言するに及び、仏教界は、厳しい局面に立たされ、神道さらにはキリスト教に対して、護法運動を強めていく。

維新政府が、明治元年に一連の神仏分離令を出すと、それに呼応して、各地で神社の仏教的物件が破壊され、廃寺・合寺による寺院の強制的削減が進められた。いわゆる廃仏毀釈である。例えば富山藩では、明治三年十月、一派一寺の合寺令が出されている。文献により数が異なるが、本願寺史料研究所編『本願寺史』第三卷(一九六九)によれば、藩内の千六百三十余寺を各宗派一ヶ寺「合計八ヶ寺」にせよという過酷なものであったという。西本願寺は、明治三年末佐田介石を派遣して藩との交渉に当たらせている。介石は、このように西本願寺の僧として廃仏毀釈に対応し、また彼自身においても、「諸宗寺院連名建白」(『世益新聞』

第二号付録、第六号、明治八年、九年「二八七五、六」や「僧家須知論一名須弥須知論」(『世益新聞』第七号付録、明治九年)などで、護法を論じている。

### 維新政府への建白(五十六〜八歳、明治六年〜八年

「二八七三―五」)

介石は、明治三年には東京に居を移して、維新政府に数多くの建白を行うようになる。『略伝』は、「師：天朝并に幕府に建言すること三十有余度、：幕府大政を返上して皇政に復せし已来、建白すること亦三十有余度」と言う。左院宛の介石の建白のうち、『明治建白書集成』には、建白「富国議」明治六年一月、「建白」清国不可討之議」明治七年九月、「建白」二十三題の議・桑茶論」同九月、「建白」地動説疑問の議・附『星学疑問』」同十二月、「耶蘇建白」明治八年一月、「建白」聖徳太子追賞ノ議」同年が収められている。

介石は、先の一橋慶喜、松平春嶽への建白において、攘夷を果たすには富国こそ肝要だと主張していたが、その富国論が、維新政府への建白・建言(中でも「建白」二十三題の議・桑茶論」)においてさらに発展・展開されていく。富国論の展開という点から見ると、維新以前の建白と維新政府への建白は連続しているのである。

しかし、維新以前の天朝・幕府への建白は西本願寺や細川藩といった有力な支えがあつて可能となつたが、維新政府への建白はそうした支えを必要としない点で性格が異なる。なるほど、建白は、下々が上申する一方行のものであるから、近代の相互的な言論と比べて不完全である。それでも、維新政府への建白は、半ば近代の言論媒体の一つであつたように思われる。維新政府は、「王政復古の沙汰書」において、「旧弊御一洗ニ付き、言語之道洞開せられ候間、見込之れ有る向ハ、貴賤に拘わらず忌憚無く建言致す可し」と、「建白・建言」という伝統的なスタイルの言論を、伝統を破つて貴賤の別なく国民に広く奨励している。そして、『明治建白書集成』全九巻に収められた膨大な量の建白書が物語るように、多くの国民が、開化主義者も介石のような伝統主義者も、それこそ「貴賤に拘わらず忌憚無く」様々なテーマで大論争を繰り広げ、新政府も（少なくとも明治七年までは）真剣に対応した。またこの建白は、新聞、雑誌、演説、さらには国会開設といつた近代的な言論の場に繋がつていく。板垣退助らの「民撰議院設立建白書」（明治七年一月十七日左院提出）は、早くもその翌日の新聞『日新真事誌』明治七年一月十八日号に掲載されている。介石も、建白書のいくつかを自らが編集・執筆している雑誌『世益新聞』に載せている。明治初年の建白は、国会開設までの

過渡的なものに過ぎなかつたにせよ、日本に近代の言論社会を切り開いて行つた重要な媒体であつたと考えられる。その主張は伝統重視であつても、介石は近代の言論社会の最初期の一員であつたのである。

#### 富国論

介石は、その富国論（社会経済説）を、「建白〔二十三題の議〕」や経済学の名著『栽培経済論初篇』『同後篇』明治十一年、十二年「一八七八、九」において、また舶来品排斥を訴えた「ランプ亡国の戒め」（『明教新誌』明治十三年「一八八〇」）、フルベッキ氏企画の懸賞応募論文（明治十年「一八七七」、『點取交通論』として明治十六年「一八八三」に死後出版）、雑誌『栽培経済問答新誌』（明治十四年～五年）など、多数の著作で詳しく論じている。

明治七年の「建白〔二十三題ノ議〕」は、政府の近代化策に対して全国に頻発した農民の激しい抵抗に触れ、「戊辰以来諸縣の暴動殆大小百ヶ処…。…ソノ責メ廟堂ニ受ケ玉ハサルコトヲ得ス。民ノ怨ムル怒レル果シテソノ本アリ」と、民衆の怒りには正当な理由があり、維新政府がその責を負わなければならないと主張する。このように、介石富国論は、明治初年急激な近代化が民衆にもたらした様々な困難と真剣に向き合おうとしている点に、特徴の一つがあ

る。明六社創立者の一人でキリスト者でもあった中村正直も、経を誦えたり仏を念じたりせず、外国貿易によって窮乏に陥った民衆をいかにして救うかを説く介石こそ「真ノ佛者也」と、厚い共感を寄せている（『點取交通論』の中村正直の「序」）。

次に、「建白『二十三題ノ議』」は、「国ヲ富スノ道ハ、消費ノ法ヲ広クスルニ如クハナシ。：消費ノ道ヲ広クスレハ、制作ノ道モ亦随テ広ク通ス」という富国の原則を述べ、民衆の困難の打開策として消費を軸にすえた経済関係の構築を主張する。明治初年、前近代から近代への移行に際して、生産と消費との関係をいかに構築していくかが、経済社会の最も基本的な問題として問われていたように思われる。福沢諭吉は、『文明論之概略』（明治八年）などにおいて、生産と消費の関係を経済の基本問題として論じ、生産者と消費者とともに重視する考えを述べている。また、徳富蘇峰の『将来之日本』（明治十九年）は、生産主義の社会を「将来之日本」の目標として立てている。介石は、生産を無視するわけではないが、消費を経済の先導として重視する。例えば豪商や華士族には、その財貨を資本として蓄積することよりも、消費に回し、農民庶民の間に還流させることを求めている。

介石富国論の特徴として、さらに、その舶来品排斥の主

張に象徴されるように、グローバル経済を退け、日本一国のローカル経済を構想していること、また介石が自身の経済論を「栽培経済論」と呼ぶことから明らかなように、農業をモデルとし、自然を育て人を育てる経済を主張していることを挙げることができる。

介石の富国論は、その天文地理説と同様、伝統的な生活世界を擁護し、保守的な性格が強い。だが、極端な資本主義グローバル経済がもたらしている今日の社会を眼の前にするとき、近代産業化社会について反省するための論点を提供しているように思われる。

#### 天文地理論争

介石は、維新後も、仏教天文地理説を主張し続け、『視実等象儀記初篇 一名天地共和儀記』明治十年「一八七七」、『視実等象儀詳説』明治十三年「一八八〇」を著し、天文器、視実等象儀を再び製造する。『略伝』は、「明治九丙子歳「一八七六」：筑後の田中久重をしてその機関を製造せしめ、肥後の松本喜三郎をして鐵圍山等を彫刻せしむ。：此器明治十丁丑歳「一八七七」に成る。同夏これを内国勸業博覧会場に出品す。」と伝えている。この時の視実等象儀は、介石の住寺正泉寺から寄贈されたものが熊本市立熊本博物館に所蔵されており、また浅草寺所蔵のものが国立



科学博物館に寄託・展示されている。写真は、上野の国立科学博物館に展示されている浅草寺所蔵の史実等象儀である。中央の軸とその右下の小さな軸が二つの輪（須弥実象天と北極実象天）を支えている所が、先に示した史実等象儀の挿絵と異なる。

介石は、精力的に天文地理論争を繰り広げている。『植地球説略』を「亜墨利加教師フルペツキ氏に」進呈し、明治七年「一八七四」には、金星観測のために来日した「米仏の星学博士」に対して、「地動を難するに凡そ六箇条」を質している。同年十二月、その六箇条を「建白「地動説疑問の議・附『星学疑問』」にまとめている。また、「明治九丙子歳、地動説に五箇の難問を附して、米利堅教師ウリヤモス氏に寄」せ、それを、「須弥地球孰妄論——米利堅教師ニ復スル天象地理ノ疑問」（『世益新聞』第七号、明治九年「一八七六」）として出版している。

視実等象儀を内国勸業博覧会場に出品して以降、邦人との論争、往復を多く行っており、介石はそれらを『天地論往復集』にまとめるつもりであったようだ。出版された『天地論往復集』（明治十四年「一八八一」）の目次には、合計

七名の人々との「往復」が列挙されている。しかし、本文を開くと、明治十一年九月から翌年二月の『明教新誌』における因幡善瑞（地動説反対だが西洋天文学にも理解を示す、上総国蓮照寺住職）との論争、さらに遠州掛塚ノ学校教師、志賀保固の質問への回答が収められているだけである。



九、「安恵初往復 安恵八肥後国小国善正寺住職也」という条が目を引く。「安恵」とは「禿安慧」（二八一—一九〇一）であることが分かり、主著『護法新論』（慶応三年、明治二年）と、さらに『天文三字経』（明治六年「一八七三」）、『天文健徑古之中道』<sup>フルノナカミチ</sup>（明治十三年

「二八八〇」の写しを手に入れることができた。それらを見ると、安慧は「花谷安慧」とも称し、「花谷道人」「勝圀道人」とも号している。早速、阿蘇郡小国町に善正寺を訪ね、住職禿浩道氏からお話をお伺いすることができた。「安慧」は「あんね」と読み、確かに幕末明治初年ここ善正寺に住し、仏教天文学を研究し、九州一円から青年僧を集め学舎を開

いていたということ、また明治初年における善正寺の様子などを、禿 迷廬著『小国郷史』『続小国郷史』を示しながら、お教えいただいた。前ページの写真は、大正十一年造営の善正寺鐘樓門と石橋である。

介石と安慧との「往復」はどのようなものであったのか、安慧は『天文健徑古之中道』の中で、「頃日一友人『台麓考』ト云一冊子ヲ贈ラル。電囑スルニソレニハヤハリ同四時ヲ主張シテ異四時ヲ斥弁シテアリ。今ノ世ニハ異四時ヲ主張スルモノハ絶エテ有ルマシキニ同四時者ハヤハリカヤウナ事ヲ旬ル者モアリト見ユ」と冷やかに述べている。「一友人」とは介石のことであろう。『台麓考』とは介石が明治十四年「一八八二」に出版した『日月行品台麓考』である。介石はこれを安慧に贈ったが、仏教天文学における「同四時」の説と「異四時」の説との対立をことさらに言い立て、「同四時」を主張する介石を、安慧は、「今ノ世ニハ」後れた者と批判している。

仏教天文学は、世界の中心に須弥山を置き、その回りに七金山を廻らせ、その外の大海に東西南北の四大洲（東弗婆提、南閻浮提、西瞿耶尼、北鬱单越）を配し、われわれは南閻浮提辺りに住んでいると言う（前掲、靈雲院写真参照）。そして、日は、地に沈むことなく、これら四大洲の上の天を須弥山を中心として一日一回転する。さらに、日

の軌道は季節により変化し、夏には内側の軌道を冬には外側の軌道を廻ると言う。この世界モデルにおいては、昼夜の変化、春夏秋冬の季節の変化の説明が、かなり困難である。「同四時」説は、その春夏秋冬が四大洲に同時に廻ってくる主張し、「異四時」説は北洲が冬ならば南洲は夏、東洲が秋ならば西洲は春というように、四洲の四季は異なると主張した。介石はなお両説の対立を真剣に議論しているが、安慧は、介石のように両説の対立に囚われていると、却って仏教天文学そのものを危うくすると思っっているのである。

#### 晩年

『略伝』によれば、介石は「明治十二己卯歲故ありて宗を天台に転じ、法を浅草寺韶舜上人に嗣く」という。そして居を浅草に定め、天台、真言、浄土、臨済、時宗など仏教各派の求めに応じ、全国各地で仏教天文学や、舶来品排斥と国産品愛用の演説を行うようになる。天文学に較べ、その富国論の演説は、説得力を持ったようだ。明治十二年、長野県下の演説では、「悉皆師の説に帰嚮して、国産を興し洋品を廢するの社を開く。名つけて憂国社と云ふ。」また、大阪府下には保国社、明治十四年東京府下に觀光社、京都府下に於て六益社などと、「我國産を興し、外品を排」す

結社が結ばれていく。

しかし、明治十五年秋からの長野新潟両縣下の演説の旅に際して病に倒れ、高田の旅亭において、「十二月九日一点の苦痛なく眠るが如くにして圓寂せらる。世寿六十有一。」と『略伝』は記している。

佐田介石は、その仏教的信念と広い知的関心とを合わせ持ち、また同時代の民衆の苦難に寄り添いつつ、言論を通して前近代から近代への日本社会の変化を真剣に生きた人であった。介石は、伝統的な生活世界を擁護する論を主張したわけであるが、その主張は、近代社会について反省するための幾つかの論点を、今日のわれわれに問いかけているように思われる。

謝辞 小論執筆に際し、多くの方々からご援助・ご教示をいただいた。京都東福寺霊雲院様には、九山八海の仏教天地の姿を象った枯山水庭園の写真を掲載することを、東京金龍山浅草寺様には、ご所蔵の佐田介石作「視実等象儀」の写真の使用を、そして小国町善正寺住職禿浩道師には、お寺の鐘楼門と石橋の写真の掲載を、ご快諾いただいた。さらに、京都大学の谷川穰氏の佐田介石研究から、今回も多くを教えていただいた。熊本近代史研究会の水野公寿氏からは、『改定肥後藩国事史料』の記載様式についてお教えいただいた。厚く御礼申し上げます。

なお、熊本県立大学名誉教授の上河一之氏、大阪大学名誉教授の猪飼

隆明氏からは、介石と出会った当初から介石研究に対する励ましをいただいてきた。深く御礼申し上げます。